

---

# あげは

坂田火魯志

---

## 注意事項

このPDFファイルは小説サイト「小説家になろう」で掲載中の小説を、「PDF小説ネット」の変換システムが自動的にPDF化したものです。この小説の著作権は作者にあり、作者または「小説家になろう」および「PDF小説ネット」を運営するウメ研究所に無断でこのPDFファイルおよび小説を引用を超える範囲で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止します。小説の紹介や個人用途での印刷および個人用途での保存はご自由にどうぞ。

### 【小説名】

あげは

### 【Nコード】

N6980A

### 【作者名】

坂田火魯志

### 【あらすじ】

吉原で遊ぶ旗本の御曹司、馴染みの花魁三吉と束の間の時間を楽しむがその吉原の夜空で見たものは。吉原を舞台にした小説です。絢爛とその裏にある悲しみを含んだお話です。

あげは

## 第一話

夜の蝶は幻、今十郎の耳に入った言葉であつた。

あげは

「何か言つたか？」

彼はそれを聞いて部屋にいた花魁に声をかけた。

今彼は吉原にいた。文政の頃、爛熟している江戸においてこの界限もよく熟れていた。夜は遅くまで灯りが消えることなくそこでは多くの男と女が仮初めの愛に戯れていた。

赤い豪華な着物を着た女達が店に並び客の目を受ける。そして二人で床に入る。そのまま共に一夜を過ごす。それが吉原であつた。一夜の仮初めの愛の世界、そこはうたたねの夢と儂い現実の狭間にある世界であつた。現実があり、同時に夢幻にある世界であつた。

十郎は今その現実と夢幻の狭間の世界にいた。そして偽りの愛を貪っていた。その相手が今ここにいる花魁三吉がふと呟いたのである。

三吉はこの吉原で名の知られた呼出しである。吉原において最も位が高いとさえそうおいそれと会えるものではない。だが十郎はそんな彼女と気兼ねなく会える身分にあつたのである。

彼の家は六千石の大旗本であつた。その次男坊であり遊ぶ金には困らなかつた。彼もまたある家の養子に入ることが決められていたがそれでもここで遊ぶことは止めてはいなかつた。当時は遊郭や男色もある程度することが粹とされていたからである。江戸生まれで粹を愛する彼にとってこうした吉原での遊びは手馴れたものであり愉しみでもあつたのだ。

鬘も髪結いに見事に整えさせ歯は念入りに磨き白くしてある。そして着物や禪にまで気を使いその身なりは助六と比べても引けはとらぬ程であつた。その彼が自分に釣り合うと認めた花魁こそこの三吉であつた。

あげは

仙台の方の生まれでありその顔立ちはほっそりとしており目は大きく黒かった。唇も赤くそれが白粉で白く化粧された顔によく似合う。そしてその肌も化粧されたように白くまるで雪の様であった。抱くとその身体にひつつくようでありそれがまた十郎の気に入った。この街ではかなり遊んできたがその中でもとりわけ素晴らしい花魁であった。十郎は金が入ると三吉のところに来て来る。そして二人で束の間の時を愉しむのであった。

この時彼は布団の中から出て外を眺めていた。もう夜も深いというのに吉原の街は明るいままであった。吉原は戌の時刻になるまでは灯りは消えないのである。

そこで声が聞こえてきた。見れば襦袢のままの三吉が布団から起き上がってそう呟いたのであった。

「いえ、ちよつと」

三吉は澄んだ声で応えた。まるで笛の音の様に澄んだ声であった。

「今蝶が見えましたから」

「窓の外にかい？」

「あい」

三吉は布団から出て来た。そして十郎の側にまでやって来てまた言った。

「ほら、あそこに」

夜の空を指差す。だがそこにあるのは夜の闇だけで十郎には何も見えなかった。

「わしには何も見えないな」

彼は言った。

「気のせいじゃないのかい？」

「いえ、気のせいじゃありません」

しかし彼女はそれを否定した。

「わちきには見えるんです」

花魁独特の言葉遣いであった。花魁達はこの吉原で生まれた独特の言葉を使っていた。わちきという一人称がその最たるものであつ

た。

「はつきりと」

「どんな蝶なんだい？」

十郎は煙管を手にした。そしてそこに煙草を入れながら尋ねる。

「あげはでありんす」

三吉は吉原の言葉で答えた。

「あげはかい」

「あい」

そしてまた吉原の言葉で。十郎はそれを聞きながら煙草を吸った。その後でゆつくりと煙を吐き出す。

「黄色いあげはがかい」

「そうでありんす。それも何匹も」

三吉は言った。

「夜の吉原に。まことに綺麗でありんす」

「そんなに綺麗なら見てみたいもんだねえ」

十郎は笑いながら言った。

「一度。それでそのあげははどんな色だい？」

「黄色でありんす」

三吉は答えた。

「黄色かい」

十郎はそれを聞きながら夜空と下の街を見た。そこには提灯の赤い光があった。

「それに青くて。白いのも黒いのもあります」

「いいねえ、派手で」

煙管から口を離す。そして煙をぶかり、と吹いた。その白い煙が煙管から出る青い煙と混ざり合う。そして黒い空の中へと消えていく。

「それが皆。夜の街に舞っているでありんすよ」

「けれどどうしてそんなのが見えるんだい？」

十郎は不思議に思っただけを尋ねた。

「御前さんだけにまたどうして」

「それはわちきにもわからないことでありんす」

三吉は首を傾げて言った。

「どうしてなのか。けれども見えるんでありんすよ」

「妙なこともあるこつた」

十郎はまた煙管に口をつけた。そしてゆっくりと吸いながらそう思った。

「どうしたもんだかね」

「一度十郎様にもお見せしたいでありんすが」

「残念だけれどわしには見えないよ」

煙管にも飽きた。三吉に渡して言う。元々この煙管は三吉のものであった。吉原では遊女が煙管を客に渡すということは好いているということの証である。助六が煙管を山のように貰うのは彼がそれだけの色男でありもてているということの証なのである。

十郎も煙管を貰ったことが何度もある。三吉に貰ったのもその中の一つだ。その吸い終わった後の煙管をまた三吉が吸う。煙管を通して口付けをしたのであった。

## 第二話

だがここで三吉は煙管から口を離した。そして咳き込みはじめた。

「どうしたい」

「いえ、ちよつと」

ちよつとは言うがその咳は妙に長かった。

「風邪かい？用心しろよ」

「あい」

三吉は十郎の言葉にこくりと頷いた。

「只でさえこの吉原にいと命が減つちまうからな」

花魁の命は短い。花の命が短いと同じである。瘡毒、つまり梅毒に白粉の鉛、酒、そして労咳、すなわち結核に。花魁はその年季までにこうしたことで死んでいく者が多かった。艶やかな夢幻の裏には惨い現実がある。吉原はそうした二つの世界が共に棲んでいたのであった。

「少し気付けに」

「おう」

三吉は酒を飲んだ。

「これで大丈夫でありんす」

「この店は酒もいいからな」

「あい」

三吉はそれにも頷いた。

「上方から。特別に運んだものでありんすから」

「そうだな。酒はやっぱり上方のが美味しい」

十郎もその酒を飲みながら言った。三吉に赤い大杯に酒を並々と注がせてそれを飲む。甘い味が口の中に漂う。

「本当にな」

「まだ飲むでありんすか？」

「ああ、もう一杯くれ」

あげは

誘いに乗って杯を出す。三吉はそれにまた注ぐ。それを飲み干した後で十郎は彼女を抱き寄せた。そして耳元で囁いた。

「この前話したことだがな」

「あい」

三吉は十郎を見上げた。その目は酒のせいか潤んでいた。それが十郎の心を通くのであった。

「兄上も義姉上もよいと言っておられる」

「まことでありんすか？」

「うむ。わしの婿入り先もな。そなたを貰い受けることはいいそうじゃ」

「嬉しいことでありんす」

三吉はそれを聞いて素直に喜んだ。

「わちきなんかの為に」

「そなただからじゃ」

十郎の声が優しくなった。

「わしはそなただから貰い受けるのじゃ」

優しいだけではなかった。いとおしげでもあった。

「よいな。もうすぐじゃ」

また言う。

「待っておれよ。よいな」

「はい」

そして二人でまた飲んだ。三吉は酒が好きだった。その時も溺れる程飲んだ。酒に溺れているのか恋に溺れているのかはわからない。だが彼女は確かに溺れていたのであった。

「それにしてもだ」

十郎は三吉を見て言った。

「いつものことながらよく飲むな」

三吉は杯を手放さなかった。そして浴びる様に飲んでいった。

「好きでありんすから」

「いや、それでもだ」

あげは

だが十郎は強くは止めなかつた。彼もいける口である。そして他人が飲むのを見るのも好きであつたのだ。

「これを飲むと。楽しいんでありんすよ」

「それはわかるがな」

だがいささか限度を越していると思つた。

「わちき等は何時死ぬかわかりやしなない身でありんす」

その通りではある。花魁の命は短い。そして死ぬば無縁仏に葬られる運命である。これが吉原の陰であつた。

「だから飲む時に飲むでありんすよ」

「さよか」

「あい。それに飲めば見えますし」

「何がだ？」

これは十郎にもわかりはしなかつた。

「夢が」

「夢なら寝れば見れるだろうに」

「それが違うでありんすよ」

三吉はにこりと笑つてこう言つた。白粉の下の顔がほんのりと赤くなつていた。そのせいで顔がうつすらと赤く見えた。

「お酒が。わちきに夢を見させてくれるんでありんすよ」

「夢をか」

思えば妙な話である。ここにはその夢を見に来ているのだ。それでこうしたことを言われるとは。不思議な感じがしたが自分も見てみたいものだと思つた。

「ではわしももつと飲んでみるか」

十郎はそれに頷いて言つた。

「酒をな。もつと注いでくれ」

「あい」

「そして夢を見ようぞ。二人でな」

そして二人はそれから飲みあかした。最後には酔い潰れた。そこまで飲んだのであつた。

気がつくとも朝になつていた。十郎は店を後にして吉原を出る。もう提灯の火は消えて朝日が見えようとしていた。その赤い光を背に浴び、鳥の鳴き声を聞きながら吉原の大路を歩いていった。

「朝鳥か」

まだ酒は残っている。だが鳥の声を聞くとその酔いも醒めてきた。吉原の朝を告げるのは鶏ではない。鳥であつた。その黒い羽根を見せつつかあかあと鳴いていた。そして門のところで十郎を出迎えていた。

その門を見上げる。鳥達は時折飛ぶ仲間を見送りながら鳴いている。十郎はそれを見て自分が狭間の世界から現実の世界に戻ろうとしていることを感じていた。

「この門を越えちまえば」

彼は言つた。門に入る。

「わしは起きたということじゃ。夢からな」

そして門をくぐつた。吉原から出た。

「お三」

三吉のことを呟きながら後ろを振り返る。

「もうじぎじゃ。待っておれよ」

そして言つた。

「夢の世界からこちらの世界に出してやるからな。そしてずっと一緒じゃ」

この時は物分りのよい兄夫婦と婿入り先に感謝した。女遊びは綺麗で程々に、それがわかつてくれた。

彼が遊ぶのは女だけではなく男も遊んでいた。そうした店にも行く。だが貰い受けまでするのは三吉だけであつた。彼女のことは夢ではなく現実であつたのだ。そして兄達もそれがわかつてくれた。これは十郎の普通の行いもよいからであつた。

確かに遊びもするが武道も学問もする。夜は夜、昼は昼でしつかりと分けていたのである。武士としての務めを果たしてこそ夜の夢の中に入ることが出来る。彼はそう考えていたのである。

だからこそ婿入りも適つたのである。それも四千七百石の大きな家であつた。將軍家が三河にいた頃からの家であり今でも幕府において大きな力がある。十郎の実家とも馴染みである。

向こうも十郎のことは知っていた。それで婿入りの話が進んだ。そして今はその準備にも追われている。昨夜の三吉との遭いそめは暫しの別れの意もあつた。それが済んでから貰い受けるつもりであつたのだ。

「金はある」

十郎は言つた。

「あとはまたここに来るだけじゃ」

そう言つて前を向き江戸の街へと戻つた。そしてそのまま現実の世界へとまた入るのであつた。

そして婿入りの用意に入った。それと仕事が忙しく吉原には足が遠のいた。だが三吉のことは一日たりとも忘れたことはなかつた。そしてこれが済んだら本当に店に行き貰い受けようと決意していた。

婿入りは無事済んだ。そして気持ちも周りも落ち着いてきた。十郎はそれedyやく時が来たと思つた。金を持って三吉のいる店に向かつたのである。ところが。

「何と」

それを聞いて思わず呆然となつてしまった。

「まことであるうな」

店の主人にそう問う。

「嘘なぞ申しません」

主人は畏まつてそう答えた。

「今は。そういうわけでして」

「左様か」

十郎は慥然としながらもそれに頷くしかなかつた。

「病か」

「はい」

主人は答えた。

あげは

「瘡毒の床か？」

吉原では最もよくある病である。

「いえ」

「では労咳か」

「それでもないです」

「では何じゃ」

「そこまでは我等もわかりませんが」

主人は申し訳なさそうに述べた。

「大した病ではないので。少ししんどいとかで」

「何だ、その程度か」

十郎はそれを聞いてすっかり安心してしまった。

「はい。二三日もすれば治ると思いますので」

主は言った。それを聞いて十郎は完全に安心した。

「ではその時に来ればよいな」

「はい」

「瘡毒でも労咳でもなければまずは安心じゃな。では金はその時に  
な」

「は。宜しく願います」

「邪魔したな。ではまた」

それで店から出た。他の店にも寄らずにそのまま吉原を出る。も

う彼は三吉以外の花魁には興味がなくなるうとしていたのであった。

「のう」

車を轆く家の者に声をかけた。

「はい」

「屋敷に帰ったらな。褒美をやるぞ」

「褒美ですか？」

「そうじゃ。それを持ってここに帰るがいい」

「旦那様の奢りですか？」

「左様。折角金を持って来てもらったのに無駄になってしまったか  
らな」

彼はおおやかに笑いながらこう述べた。

「弾んでやるからのう、いい女と遊んで参れ」

「有り難うございます」

「ただし、瘡毒には注意するようにな」

彼はこう付け加えることも忘れなかった。

「あれはかかると怖いからのう」

「鼻が落ちるのですよね」

「それだけではない」

彼はまた述べた。

「身体も腐る」

「腐る」

「そして頭に来るのじゃ」

「恐ろしい毒ですね」

「そうじゃ。じゃからそれには気をつけるようにな」

「わかりました」

実は『頭に来る』という言葉のもとはこれであるらしい。梅毒の末期症状であり、梅毒が脳にまで達してしまった状態である。こうなるともう助かることはない。この時代では梅毒で死ぬ者も多かった。髪が抜け落ち、鼻が欠け、身体が腐っていくのだ。その前に全身に紅の発疹ができ、これが梅毒の語源となった。瘡蓋も出来るので瘡毒とも呼ばれた。江戸時代吉原ではこの病気はよく見られた。絢爛なこの夜の街の闇の部分であった。

家の者にそんな話をしながら帰った。そしてその日は新しく夫婦となった婿入り先の妻と夜を過ごした。だがその心はまだ吉原にあった。

### 第三話

妻と夜を過ごした後でふと部屋を出た。そして中庭に面した廊下で夜を眺めた。彼の前には大きな池があった。そこに白い満月が浮かんでいた。

「あの時の空と同じじゃな」

三吉と二人で見た夜の空を思い出していた。あの時は下に提灯の赤い灯りがあつたが今はない。だがそれでもそこには月の灯りがあつた。それは赤い光ではない。白い穏やかな光であつた。だが提灯のかわりには充分なつていた。十郎はそれで満足していた。

「あげはか」

あの時三吉が言ったことを思い出した。

「夜にあげはがのう」

だが彼には見えはしない。そもそも夜に蝶が舞うということ自体が有り得ないことである。それこそ夢の話だ。彼は今は夢幻と現実の狭間にある吉原にいるのではない。現実の世界、自分が婿入りした家の屋敷にいるのである。その中庭に面した廊下で夜空を眺めていた。そこは完全に現実の世界であつた。夢幻の世界ではない。

その現実の世界の夜を眺めていた。そこであげはが見られる筈もなかった。

「もし」

後ろから声をかけてくる者がいた。女の声であつた。

「そなたか」

「はい」

寝巻きを着た美しく若い女であつた。彼の妻である。幼い頃から許婚であり、この度結ばれたのである。見知った同土であるがそれでもこうして夜を共にすると何か妙な気持ちであつた。

「空を見ておわれるのですか」

「うむ」

あげは

十郎はその新しい妻に答えた。

「少しな。思うところがあつてな」

「思うところ」

「一つ聞きたいが」

彼は妻に問うた。

「夜に蝶が飛ぶと思うか」

「蝶が」

「そうじゃ。どう思うか」

「蝶は昼に飛ぶものでしょう」

妻はこう言葉を返した。

「夜に飛ぶのは。蝶ではありません」

「そうじゃな」

十郎はそれを聞いて頷いた。

「夜に蝶はおらぬな」

「はい。私はそう思います」

「そうじゃ」

彼は納得したようにまた頷いた。

「あれは昼におるもの。夜にはおらぬ」

まるで自分自身に納得させる様に。そう言った。

「では今は見ることができぬ」

「違うのでしょうか」

「いや、その通りじゃ」

彼は言った。

「それで合つておる。昼と夜は違うもの」

そして現実と夢幻もまた。

「道理とはそういうものじゃ。聞くまでもないのう」

「一体どうなされたのですか？」

「いや、何でもない」

こう言つて誤魔化した。

「何でもないぞ。では寝るか」

あげは

「はい」

「明日も朝から稽古をしなくてはならぬからのう」

武士は朝にまず稽古をするのがよいとされていた。素振り等である。十郎は丸太の様に太い木刀を毎朝何百本も振るのを日課としていた。吉原から帰ってもまずこれをする。そして身体を鍛えていたのである。これは武士としての務めであった。

「ではお休みなさいませ」

「うむ」

妻に誘われ部屋に戻った。そして枕を並べて眠るのであった。吉原での眠りとは違っていた。静かで穏やかな眠りであった。

暫くまた忙しくなった。今度は仕事であった。その為吉原へはまた足が遠のくことになった。三吉のことは忘れてはいないがそれでも行くことができずに悶々とすることになってしまった。

そんな日々が続いたが彼は安心していった。三吉の容態は軽いとのことなので安心していったのだ。だが会えないのはやはり辛かった。それで悶々としていたのである。

だが忙しいのも何時か終わる。仕事も一段落ついた。十郎は空いた時間を見計らって店に向かった。家の者に身請けの金を持たしたうえである。

「ようやくこの日が来ましたなあ」

「そうだな」

後ろの車で金を轆く家の者に応えた。流石に呼び出しを身請けするとなればそうそう見られる額の金ではない。だがそれでも彼はそれだけの金を用意したのである。そしてそれを持って吉原に入ったのである。身請けはもう決まったようなものであった。

だがそれは適わなかった。店で彼を待っていたのは思いも寄らぬ言葉であった。

「それはまことか」

「はい」

主は沈痛な声で彼に応えた。

あげは

「言にくいことですが」

「病は軽いものではなかったのか」

彼は主にそう問うた。

「そなたもそう申しておったではないか」

「確かにそうでしたが」

主の言葉は過去形であった。

「昨日の朝急に具合が悪くなりました」

「それまではどうだったのじゃ」

「ようございました。そろそろ店に戻ろうかという話をしておりますし」

「それで。急になだというのか」

「左様で。身体がよくなったからと酒を飲んだのがまずかったのでしょう」

「酒か」

十郎はそれを聞いて顔を顰めさせた。

「酒の毒で」

「そちら様も御承知の通り三吉は酒が好きでして」

「うむ」

それは彼もよく知っていた。いつも一緒にいる時は互いに漬れるまで飲んだものであった。

## 第四話

「飲むととことんまで飲む性質でして。その時もそうでした」

「潰れるまで飲んだのじゃな」

「そうです。本当に潰れるまで」

「それでか」

十郎にも何故彼女が死んだのかわかった。酒の飲み過ぎでそれに飲まれたのであった。これで死ぬ者もいる。酒が毒だとも言われるのはそのせいであった。

「眠ったまま死にました」

「眠ったままか」

「顔は穏やかでしたが。身体は熱うございました」

「酒を飲んでいたからな。当然か」

「だと思えます。それで申し上げにくいのですが」

「わかつておる」

彼は頷くしかなかった。

「それでは帰らしてもらおう。邪魔したな」

「はい」

こうして彼は仕方なくその場を後にした。肝心の相手がこの世にいなくなつてはもうどうしようもなかった。為す術もなく帰るだけであつた。

十郎はそのまま暫くは吉原に行くことはなかつた。だがどうしても三吉のことが忘れられなかつた。起きても覚めても思うのは三吉のことばかりであつた。いたたまれなくなつて遂に吉原へと足を向けた。婿に入つてはじめて呼出しを呼んだのであつた。

あげは  
何回か会つてようやく床を共にすることができた。何処か三吉を思わせる色の白いあどけない娘であつた。まだ呼出しになつて間もないか、若しくは花魁そのものになつて短いのか。花魁とは思えぬ初々しい感じの娘であつた。

「のう」

床を共にした後で十郎は窓のところに出た。着流しを着てその花魁に声をかけた。

「あい」

花魁はまだ布団の中にいた。赤い布団の中から彼に声をかける。その白い裸身が行灯の朧な灯りに照らされていた。

「わしは。はじめてか？」

彼は煙管を吸いながらそう尋ねた。この呼出しから貰ったものである。

「あい」

女は俯いて答えた。

「ここに入って。すぐでありんす」

「そうか。それで呼出しか」

「運がよかつたでしょうか」

「よかつたのじゃろうな」

彼は煙管から口を離してそう返した。

「花魁でもな。呼出しになれば違う」

「左様でありんすか」

「うむ。それもわかる」

そう言いながら煙管を花魁に返した。

「いずれな。そして色々と見るじゃろう」

「吉原のことでありんすか？」

「それもある」

彼は言った。

「しかしそれだけではない。他にも見えるものがあるじゃろうな」

「花魁は吉原からは出られんでありんすが」

「外で見えるものだけではないぞ」

彼はそれでも言った。

「空を見上げるとな。見えるものがあるそうじゃ」

「空を？」

「左様じゃ」

そう言いながら上を見上げ続ける。

「空に。蝶が飛んでおる」

「昼間はそうでありんすな」

「昼間だけではない」

「はて」

花魁はそれを聞いて首を傾げた。その間に十郎は杯を手にしていた。そこに花魁から酒が注がれる。

「酒か」

十郎はその透き通った酒を見てふと呟いた。

「あれも。好きじゃったのう」

「あれっていいいますと？」

「いや、何でもない」

だがそれは誤魔化した。伊達に男意気で売ってきたわけではない。昔の女のことを今床を共にしたばかりの女の前で言うような無粋な男ではなかった。

「まあ飲め」

そして花魁にも酒を勧める。

「ただし飲み過ぎぬようにな」

「わつちは酒には弱いんで」

「それでも飲めないというわけではあるまい」

「あい」

それに応えて飲む。その飲みっぷりは中々見事なものであった。

「飲めるではないか」

「左様でありんすか」

「そこまで飲めれば見事なものじゃ。まあそれでも程々にな」

三吉が酒で死んだことが頭にあった。それでこう言ったのである。ああしたことがあつてはとも飲めとは勧められなかったのだ。

自分も杯を近付けた。そしてその中を覗き込む。

そこには月が映っていた。白銀の大人しい光をたたえていた。そ

ここにはもう一つ別のものが映っていた。  
「むっ」

それは蝶だった。色彩り彩りのあげは達がそこに映っていた。黄色いのもいれば青いのもいる。白いものや黒いものもいた。それは濃紫の空の中に上から白銀の光を浴び、下から赤い提灯の光を浴びて舞っていた。そして夜の空を飾っていた。

「酒に映っておるか」

十郎はそれを見て呟いた。

「酒の中に。じゃからか」

三吉がどうして死ぬまで酒を飲んだのかわかった。この蝶達を見る為であったのだ。

今それがようやくわかった。そしてそれがわかると急にいとおい気持ち胸に湧いてきた。

「あの時に言えばよかったのにな」

蝶のことを言った晩のことを思い出した。不意に目に涙が宿る。

「どうしたでありんすかいな」

「何でもない」

咄嗟に誤魔化した。

「目にゴミが入っただけじゃ」

「左様でありんすか」

「それよりな。また注いでくれ」

「こつ言つて杯を前に出した。」

「今宵は。飲みたい」

「それでは」

花魁はそそつと十郎の側に寄った。言われるがままに酒を注いだ。

「どぞ」

「うむ」

また杯を見た。そこにはまた蝶が映っていた。

「吉原にだけ見られる蝶か」

心の中で呟く。

あげは

「これが夢か。成程な」

夢幻と現実の狭間にある場所。そしてそこで現実にながら夢幻により近付いた時に見えるもの。それが蝶であったのだ。

十郎はそれを眺めながら酒を飲む。ふと上を見上げる。そこにはあげは達が美しい羽根を拡げて飛んでいた。そして夜空を覆っていた。

あげは 完

2・18

2006・

あげは

PDF小説ネット発足にあたって  
PDF小説ネットは2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

# 広告募集中

小説関連広告に最適です。  
出版社や印刷会社はもちろん、  
個人の広告でもOK

縦：140mm 横：110mm

詳しくはPDF小説ネット広告募集をご覧ください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n6980a/>

---

あげは

2009年7月2日03時58分発行